



卯

花

第參拾七號

中央歌文會出雲平田支部

日五十月二十年二十四治明

525

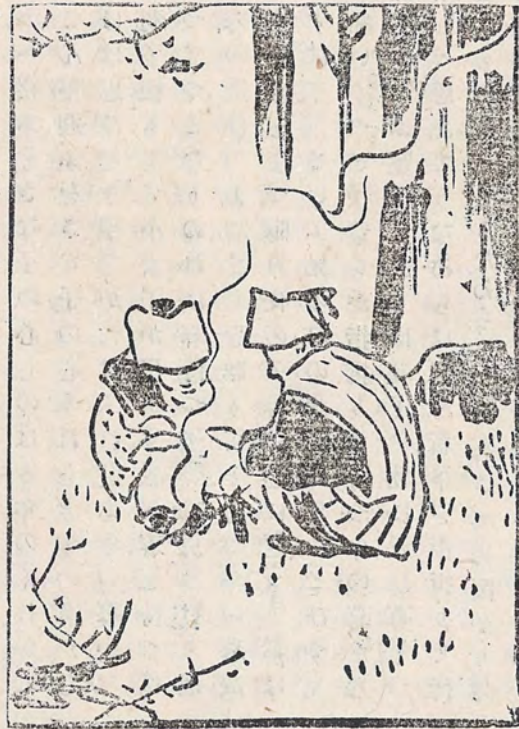
○勅題詠進に就て

勅題「新年雪」十二月二十八日迄に詠草れ
 回しあらば書式相整へ同送詠進取計ふべ
 し尤も直接御詠進の向は寫し御回し相成
 度本誌新年號に相連ねて掲ぐべし

集書 來問年枝

○支部雅會狀況

十二月六日定期雅會を來問幹事の寓に開き本會一月分と支部本月分の兼題を詠出互評し偶々當支部設立の元老なる石橋雲洞氏より消息到



し來年に於ける會運の發展策を談し新年御題取まごめ詠進の件を申合ひ散會せり

十二月六日定期雅會を來問幹事の寓に開き本會一月分と支
 着せしを
 以て即座
 に各々返
 歌を詠み
 て直に郵
 送したり
 本年の納
 會とて晩
 餐を共に

○歳暮兒童（本會十二月分兼題）



こん年をむかへ喜ぶをさな子の心しのはる年のくれかな
 はれき着てこん年迎ふをさな子の心うれしき年の暮かな
 春をまつ外には思ひなき子らかたはふれ遊ぶ年の暮かな
 手にあまる羽子板もちて小女子か指折り數へ春を待つ哉
 をる指も一つ二つとなりぬれは春待つ子等は勇みける哉
 うなる子は春の遊びのあらましを語りてそ待つ年の暮哉
 ねもやらて來ん年をまつ晦日夜の子等か心に返らましかは
 指をらせあすは二つといふ兄のれのか齡は母にとひつゝ
 いくつねて齡いくつと子童らか指折り待つ年の暮かな
 來ん年を待ちやわふ覽うなるらは羽子に毬に遊び暮しつ
 暮るゝ年惜しと思ひてうなるらは來ん新年を指折り待
 世のうさを知らて遊へるうなるらは年の暮さへ長閑かり覺
 こん年の何の事業立てつ覽暮るゝ遅しとわふるうなる子
 學ひ居し子らはことく歸來て子實たほき年のくれかな
 とる年を嬉しと子等は競ひ筒たて果てぬ松の下くゝる也

- 石橋櫻桃
 同 池田正躬
 糸原鐵軒
 同 原 彩雲
 本多直愼
 同 小村水石
 同 綿貫閑溪
 河口鏡花
 同 高橋香雪

ゆく年もいと早けれどうなるらかのひゆく丈に驚かれぬ
 年のくれ風よかるたどうなるらか春のまうけの忙しき哉
 明け行くをねられぬ程にまちくゝて子らか喜ぶ年の暮哉
 春をまつ心せかるゝわらへらは暮れ行く年も樂しかる覽
 ふる雪とつもる齡を樂みて子らはまつなり年のくるゝを
 毬に羽子取り調へて春を待つ兒らの心やいかにうれしき
 風を張り毬をつくりて子供らもいそかしけなる年の暮哉
 羽根をうつ年の初を少女らか残る一夜にまちわふるかな
 年一つ積むをうれしみをさな子か今宵長しと明けを待也
 春をまつ心はかりのうなるこは暮れ行く年も惜まさり覺
 暮れ果てし年は惜まて新玉の春を遅しとまてるうなるこ
 年くれて苦しむ親を知らぬ子は明日を樂しみ生たちに覺
 待ちにける我八つ年も一夜とそ喜ぶ子らのたのもしき哉
 鐘の音に暮れて行くなる年の瀬も心樂しきこらかさゝめき
 くれて行く流れて早き年波のよるこも知らぬ稚兒の長閑さ
 うなるらは年ふる雪の積れるをいと嬉しけに遊びつる哉
 子らは皆年のくれとてたのもゝいかに毬よといとなかり覺

- 玉木雪華
 同 永江峯穹
 同 植田盤峯
 來間年枝
 同 黒田麻山
 同 山岡文枝
 同 山根碧雲
 同 古川紫光
 同 古瀬勝良

行年にをはの文得しうなむ子の夜半の夢社樂しかるらめ
 年くれて心八潮にせかるゝをそれ共知らぬいちらしの子よ
 くれ残る年の日數のすくなきに何心なくあそふ稚子たち
 春をまつ事の繁きをよそにして幼き身には嬉しからまし
 つとめなきをさな童も家人にならひて走る年のくれかな
 一年のわさを終へて學兒の机のちりをはらふくれかな
 新しき紙鳶よ羽子よと兒童らか來ん春を待つ年のくれ哉
 來ん年を子らは待ちつゝ遊ふなりいとなき親の心思はて
 誰もみな年の暮とてせはしきに何心なくあそぶうなむ子
 一つます齡たのしみ幼子か指をりてまつとしのくれかな
 門まつに餅搗れどに兒心もうれしき色のかほにみえつゝ
 初春をまつにはあらで縫立の袴はくへく兒は待ちにけり
 子は智惠のゝひて短き衣さへあらためぬ間にくるゝ年哉
 暮れて行く年は幾つと問へは子のあすは嬉しき片手あけ筒

- 平井啞聲
- 同 青木素翠
- 同 木佐和久
- 同 木村翠月
- 同 木村つね
- 同 木村榮三郎
- 元井素居
- 同 母里春草

○古 瓦

(本會十二月分兼題)



こゝかしこのこる大城のふる瓦昔の様のいとゝしのはゆ
 一つの頃きつきしものか山寺のやねの瓦の古くもある哉
 よくふかき翁かほりしふる瓦黄金にまざるをしへなり鼻
 いたつらに數多の年をふる瓦玉ならぬ身を悲しかりける
 霜雪をしのきくゝて古かはらこけの衣をかさねけるかな
 古寺の棟にしきたる鬼かはら苔にうつもれ鳥あそふかな
 年ふれは瓦をさへに思ひきや玉にもかへて世にめてんとは
 百千年ふる雨露にうたれつゝなほ角をらぬ鬼かはらかな
 かくはかり苔むす見れば霜雪をいくよふりたる瓦なる覽
 ますらをか玉とくたけし古の大城の跡のかはらなつかし
 時めきし家の構へもあれ果てゝ世をふる瓦苔むしにけり
 吉野山御楯となりし古かはらのこれと今はとふ人をまれ
 傾きし古家の軒のふるかはら昔しのふの生ひしけりつゝ
 碎けても昔大城の名とゝもに千草くちさる古かはらかな
 壁たちて軒傾けと古寺のかはらはいまにかはらさりけり
 あれはてし深山淋しき寺の跡むかしを語る古かはらかな
 くつれたる瓦の庵は明暮にとつれば雨のしつくり來ぬ

- 石橋櫻桃
- 同 池田正躬
- 同 糸原鐵軒
- 同 本多直愼
- 同 小村水石
- 同 綿貫閑溪
- 同 河口鏡花
- 同 高橋香雪
- 同 玉木雪華
- 同 永江峯穹

賤か家に昨日しきたる古瓦けふ降る雨にたふへくもなし
 もろこしの阿房の宮のさかえをも見せて残すは瓦なり鳥
 桑島の中よりいて、變る世をかたるか古き鬼かはらくつ
 いかはかり年ふる寺の鬼かはらつのも大方折れはてに鬼
 淺茅生に古き都の跡見せて苔むすかはらくよへにけん
 城あとに瓦はかりは苔むして玉とくたけし人のしのはゆ
 いく年か雨露よけし屋根かはら色こそうせめ功績高しも
 色は失せ片えはかけて屋根瓦賤か家居のあはれさを見ゆ
 吹雪する古屋根の上にかめしくこれ見よかしの鬼瓦哉
 荒寺の屋根の瓦も年ふりて苔むしなからすたれゆくかな
 名に残る長者か原の古かはら幾世へぬらん訪ふ人もなし
 苔むしてふりし瓦にこそ問はん人うつり行く世の人の心を
 石の上ふるき姿の見るへきはありしなからの瓦なりけり
 苔むせる瓦を見ても思ふかな玉とくたけし人のむかしを
 年たちてわか故郷を訪ひくれは語らんものはふる瓦のみ
 苔むして残る瓦のあと訪へはむかし語らん友かきもなし
 しのひ來てあはれ大城の跡訪へは草村の中かはら残り

永江峯穹
 植田盤峰
 來間年枝
 同 黒田麻山
 同 山岡文枝
 同 山根碧雲
 同 古川紫光
 同 古瀬勝良
 同 平井啞聲
 同 青木素翠

霜雪を凌ぎて棟にかめしく鬼のかはらに苔むしにけり
 砕けつる瓦の片を拾ひけりむかし大城の跡にやあるらん
 をさめぬし瓦いたして見つるかな昔大城の跡をしのひて
 苔むして残る瓦やますらをの玉と砕けしかたみなるらん
 ふる畑に残るかはらそ榮えにし鎌倉山のかたみなるらん
 千年へし奈良の都のいにしへも残る瓦にしのはるゝかな
 あふき見る大佛殿の古瓦いく千代へてもかはらざるらん
 そのむかし亡ひし都あとゝへはのこる瓦に苔むしにけり
 天皇のみここかしこみ造られし御寺の瓦いく代へぬらん
 山松のかげの社の鬼かはらむかしの色めつらしきかな
 古のいくさの城の跡なりと掘り出したるふるかはらかな
 是も亦むかし語れば忍はるゝ尼子の城のふるかはらかな

同 木佐和久
 同 木村翠月
 同 木村つね
 同 木村榮三郎
 同 元井素居
 同 母里春草
 同

○ 旅宿歲暮 (本會十二月分初學兼題)

さなきたに眠りがねける旅枕思ひいやます年のくれかな

石橋櫻桃

さすらふる我身はまたも草枕旅ねに年をくらしつるかな
よそなから旅の假家に行く年も身にそふ老は逃れさり鼻
くれて行く年を旅路の宿にして送る今宵そわひしかりける
春霞立出てしより月日はふるさどこひし年のくれかな
掛乞のせめをのかれてはたこやに立籠りたる年の暮かな
袖ぬらす憂世の旅の宿なからつれなく年の暮れて社ゆけ
宿らんと人はつこへと暮て行く年は旅にもとまらさり鼻
立出て、野くれ山くれたひ枕かりねのやとに年はくれ鼻
旅にして春まの業もなき宿は暮れ行く年ものどけかり鼻
いかにせんすへき業も遂けすして旅ねををしき年の暮哉
うき旅に暮れ行く年の淋しさも添て夜すからいねかてにする
たひ枕かさねて故さとの夢路一夜にのこるとしかな
さらてたに故郷思ふ旅の宿年のくれ行く今日にあふとは
さきくあれと炭さしそへて妻懐ふ大晦日の旅のやとかな
いく月日たひに暮しつ故郷の空なつかしき年のくれかな
真かね路を急ぐ車の旅なから今年もくれとなりにける哉
年くれていよ、心のせかるゝを旅ねの宿に何をなさはや

池田正躬
糸原鐵軒
本多直愼
小村水石
綿貫閑溪
河口鏡花
高橋香雪
玉木雪華
永江峯穹
植田盤峰
來間年枝
黒田麻山
山岡文枝
山根碧雲
古川紫光
古瀬勝良
平井啞聲

いかにせんと年のくるゝを惜む哉我行く先も知らぬ旅路に
真金路は雪に埋みて心せき旅ねかさぬるとしの暮れかな
故郷の母に手紙をたくりつゝ旅のやとにも年の暮れかな
人皆の年の暮には似もやらてうら安らけき旅ねこそすれ
學はんとはるゝ來ぬる我一人残して年はゝや暮れに覺
暮れて行く年の境に旅ねして夢により來る波のれとかな

青木素翠
木村翠月
木村つね
木村榮三郎
元井素居
母里春草

○紅葉を贈られし人に讀みて遣はす (本會十二月分競點兼題)

あさからぬ君かなさけを一枝の紅葉の色の深きにそしる
錦なす机のしまの紅葉はをたくりし君にはちることのは
めくまれしもゆるはかりの紅葉はに君か情の色も見え筒
おくりてし人の心は紅葉はの其色にさへあらはれにけり
そのむかし酒温むとさく紅葉たくやたかすや贈られし君
たまはりし紅葉一枝の瓶さしは書をよむ窓を照しつる哉
たくられて思ふ心もみたれけり紅葉の色のふかき思ひに
たくられし紅葉の色の濃きにつけ君か心の赤きをそ知る

池田正躬
原彩雲
本多直愼
小村水石
玉木雪華
來間年枝
黒田麻山
山岡文枝

身にしめて豈忘れめやれくりこし君か心と赤きもみちは
 たくりてし心の色のこき紅葉浅からめこそ我れもひなれ
 時來れは龍田の神の染めなし、あかき紅葉の心うれしき
 あさからす匂ふ紅葉は贈りてし君か心のそめや増しけん
 贈られし赤き心は紅葉はのそれにもましてゆかしかり
 花よりも勝る紅葉のいろよりも君か恵みの尙ほ深きかな

古川紫光
 古瀬勝良
 青木素翠
 木村翠月
 元井素居
 母里春草

課外



里首冬 南天の實もいつしかと色つきて小鳥むらかる冬は來に鳥
 時雨のふり さらぬたに淋しく思ふ芝庵にしは／＼ふるは時雨なり鳥
 惜紅葉 いつ迄も枝にとまらぬ紅葉は風のしわざと思ひける哉
 鹽 世の中からのき味をは知りて鼻親の手しほに育つ此身も
 同 難波かた鹽のさし引すれば社あまくも渡れからき世の中

手鏡鏡水
 平井啞聲

●名古屋なる雲洞ぬしより消息ありければ

名にしれふこかねの城に恙なくたかき譽をかさねませ君
 名にしれふなこやの城を枕せる君か駟のたかくきこゆる
 名にしれふ黄金の城にてりはえて功たてませ人目引くへく
 なるみ瀉かよふ千鳥と我なりて玉章のみか君に逢は、や
 名にしれふ名古屋の大城とよむ迄高き名あけて君や遊へる
 名古屋あたり黄金に夜半を照らす覽里も卵の花闇なかり鳥
 歌むしろしきてしをれば嬉しくも雲よりわたつる雁の玉つさ
 なにしれふ城のしやちほこ勇ましき人よと君を人やめつ覽

石橋櫻桃
 母里春草
 木佐和久
 高橋香雪
 同
 同
 來問年枝
 同

●本會二月分兼題
 寄水祝、星、野霞、梅、
 ●支部一月分兼題
 新年言志、虹、
 切
 限日十月一

●一月雅會は九日午後一時より平田町
 木佐和久宅に開會致候に付御繰合せ
 御出席相成度候

○四人相伴ひて大原郡加茂村に赴く途中四また越のあたり
 「秋旅」てふ題にてゆく／＼よめる

いろ／＼と語りあへ共言種は木々の紅葉の外なかりけり 木佐和久
 もみち葉はゆくて照して夕日影さこそいそかね秋の山踏 來間年枝
 紅葉はのてりそふ秋の旅路とてくるゝ迄さへ急かさり覺 小村水石
 をちこちの紅葉の色に足とめて思はすくるゝ秋の山みち 原 彩雲

○宮永さだ子刀自の信濃に赴かるゝをれくるごと

更科の月も長野の雪もみてことはの花をさかせてよきみ 木佐和久
 世を照す月と也ませ更科やあきらけき世は田毎のみかは 高橋香雪
 みすゝかる信濃しならひ暮しませ出雲はいつも思浮へて 來間年枝

○年の暮れに

木村つね子

初雞の聲きく朝こ村鳥ねくらにかへる夕くれとはそも人の感想やいかに、今年も早や
 日數つきていとも名残の惜しまるゝに至る、ア、既往をかへりみれば徒に日を経たる
 のみ、うたゝ爲さるゝを耻つへきなり、ここの彌生古川紫光ぬしのすゝめにより卯の
 花垣の友とはなりぬ、いともたこがましと世人の笑ひしもあるべし、さるに「行路の
 花」天位の撰に入りしはこれなん饒憚なめれど、この快事、いまだ腦裏を去らず、年

いまはてなんととして回顧すれば、この一影をのみ存す、耻づべきの外なし、處世の苦
 みも、病苦もまた之が爲に慰められぬ、學ふへきは歌の道、みちひけよ、歌の友。

○雪の夜

山根碧雲

降り續きの雪も止んで今日は珍らしい日和であつた、
 夕飯をすまして家を出ると一面の銀世界、何とも云へぬ快い感じがする、風もなくあ
 まりの寒さも覺えぬ極静な宵だ、犬の聲もしない、不空を仰ぐと「ゾッ」とする程凄
 い、利鎌の様な近わた月が、雲間を漏れて蒼白う僕の顔を照した、此の時、
 天真爛漫、只々、この天地自然の美景にあこがれた

○柿の舎の記

來間年枝

昔、向井去來、ある年嵯峨のふる家に在りて、夜すがら柿の落ちたりければ、「柿ぬし
 やこずるは近きあらし山」と吟じ、京なる友ごちの許に贈る消息に、落柿舎の去來と
 書きはじめたりとかや。今、予は自ら選びて柿の舎と名づけんとす。そは、爾雅翼に、
 柿の七絶とて、一壽、二多陰、三無鳥巢、四無虫蠹、五霜葉可玩、六佳實可饜、七落
 葉肥大可以臨書をあげたるが如く、その徳もいとさには、又、歌の聖の御名にさへ通
 へるもめでたければなり。殊に、柿の實、初めは色青く味澁けれども、日數経る程に、

ねならず甘きものとなり、老いたるも、幼きも、こよなく、之を好むものにしあれば、あはれ、予の嗜む和歌も亦これにたゞひて、すがひくゝに口馴れつゝ、まろらかに、うまみも出て來ん後の日こそねがはしけれ。かの稱名三味は、つひに阿彌陀に攝取せられ、唱題は自然に本尊の影を生じて、つひに佛果を得るものとし聞けば、かゝる願も、いかでか空しかるべき。かく思ひ定めて、このよしかさしるし、近きあたりを眺むれば、柿の梢に夕日照りそひて、赤らめる實の數も、あらはに、其葉の霜に染みて、緋に見ゆるも、いとをかしうてなん。

ここの葉に柿の甘くもならん日をたのみ樂しみ我は勵まむ

○加茂雅會の景况

(霜月第二號轉載)

十二月六日夜、歌むしろを西東屋旅館に敷く、寄り集ひし會友は古瀬勝良、多田納赤川、平井啞聲、木村翠月、井田曉雨の五名、まづ炬燵櫓に車座となつて一同晚餐を共にしたる後、平田支部より送られたる「卯の花」を配附し各自の詠草につき互評し歌談、初學參考書談などに時ならぬ花を咲かしめぬ、席題として「氷」を課せり、散會せしは十一時なりき。

風寒みいさゝ小川や氷るらん流るゝ音も今さは絶えにき 古瀬勝良
千町田も野澤も氷る此夜半にいつこを鳴はあさるなる覽 平井啞聲

わか宿の池も氷にささゝれて眞如の月のかけもうつらし 同

今朝見れば池は氷のはりつめて緋鯉眞鯉のかけもみとめす 井田曉雨

井田兄の新 移し植ゑし君か御庭の姫小松しつ枝繁れはつ枝さかえよ 啞聲
婚を祝して わか庭に移し植ゑたる姫小松君かめくみに色やまさなん 曉雨
返 勝良翠月兩 卯の花の月かけさよき桂川わたる舟路の瀬々をゝしへよ 啞聲
兄へよせて 麻山兄へよ せり渡る月のみかけの高麻山言葉の道のしをりとやせん 全
赤川兄の入 赤川の花にはふ平田に赤川の清き水引く今日そうれしき 全
會を祝して 八雲立つ出雲八重垣卯つき垣結ふ今日こそ樂しかりけれ 赤川
入會の辭

○尙當月より左の諸氏を得て會友拾名となれり

多田納赤川、 杉原秋水、

○新入會友

大原郡屋裏村 (赤川) 多田納誓三 大原郡加茂村 (曉雨) 井田雄次郎
全 郡加茂村 (秋水) 杉原松吉 計九十三名 (右黒田麻山紹介)



明治四十三年支部兼題

(一題二首限)

一月	新年言志。	虹	七月	行路夏草。	瀧
二月	初聞鶯。	雨夜	八月	雨後蟬。	夜舟
三月	霞隔山家。	夢	九月	草花告秋。	笛
四月	川落花。	山彦	十月	風前鹿。	送別
五月	深山餘花。	苔	十一月	月前千鳥。	猪
六月	急早苗。	蜘蛛	十二月	雪中旅。	和歌

右は野崎主事の選を乞ふ